

心を動かす学びを —文化としての教科教育をどの子にも

元障害児学級教員・埼玉全障研サークル麦の会 北川祐子



田村勝治さん

たむら かつじ / 1916年～2002年。
大正自由主義教育を受ける。38歳で校長。勤評闘争の裁判では法廷で証言。群馬の障害児教育を教師と共につくる。退職後は埼玉全障研サークル麦の会共同研究者として教師を育てる。著書に『障害児の教科指導』（明治図書）など。

落としていた子どもの姿を見つけ出し、「そこから本質にせまれたと思うよ」「授業のなかで、瞬間瞬間に動く子どもに対応するのは教師の力量である。子どものことばや動きのなかからその意味をつかみ取り、次へ発展させていく敏感さは我々の終わることのない課題である」「それは共同で追求する」と語りました。

*

教員たちも仲間のなかで育っていく。どの子も目を輝かせて学び合えるようにとのねがいを込めて、新しい教員には優しく、常連には厳しく、課題を見極め育ててくださった真の教育者でした。

田村さんが教えてくださったことは、今も大切だと思います。

(きたがわ ゆうこ)

田村さんは校長として学校づくりを実践し、戦後の群馬の民主教育の運動をけん引してきました。障害児教育にもそういう視点から重要な提案をしています。その集大成は『障害児の教科指導』（明治図書）です。

退職後22年間、毎月1回麦の会の共同研究者として埼玉の教員たちを育てていただきました。私が田村さんからとくに初期のころ学んだことを振り返りながら、田村さんの人となりを紹介します。

1年目は、子どもを語り、教科指導を語るなかで「子どものとらえ方」を中心に学び合いました。学級を混乱させ、先生を困惑させる行動のなかに子どもが発達しようとするねがいがかくされていることを発見する仕事でした。私が施設内学級の荒れる子どもの話をする「子どもの悲しみのわかる教師になりなさい」と静かに語りました。「学校で洗濯や食事の世話をしたけれど乱暴は治らない」と、貧困やネグレクトで苦しむ子どものことを涙ながらに語る担任の話にじっと耳を傾けて聞いていらした田村さんは、「ところで、いったいあなたは何を教えているんだい」「ご飯を食べさせ、体をきれいに洗ってあげ、家庭を支える

ことは大切なことだけれどね」「それはあなたのやるべき仕事とはちがうんじゃないかい」「勉強をちゃんと教えているんかい」「子どもを良くするのは、教科の指導を的確にする以外にない」「人間が発達するためには、すぐれた文化を獲得する。その活動の中心は教科の学習である」と語りました。「教師の仕事とは何か」衝撃をもって学びました。

2年目は子どもを伸ばすための「教科学習」を討論しました。絵を広げて、子どもの実態を語ることから始まり、絵本の読み取りや空気の学習など、集団で学び合う子どもたちの事実と実践を語ってきました。田村さんは、「この子どもたちは大変敏感である。教材は芸術性が豊かで科学性に富んだ本物を」と、「何を学ぶのか」教材の本質について語り、「活動を通して学級がつくられていき、教材に立ち向かう子どもたちの結びつきが教材を深めていく」と学級集団づくりを語りました。

3年目には公開授業を提案。授業後の研究会では、「あの子のつぶやきが大事だった」「あの子は何度も試していた。何を考えていたのだろう」と、思ったままを自由に出し合いました。田村さんは、授業者が見